

育児の社会化を考える

——中国の「寄養」と「寄宿制幼稚園」のレビューより——

石 晓玲・桂田恵美子

1. はじめに

少子高齢化がすすむ現代の日本において、「子育て」が個人の家庭の問題という考えから、「子育て」は社会全体の責任において行うべきという考えに変わり、今日の子育て支援のキーワードの一つに育児の社会化が挙げられるようになった。中国は伝統的に育児の社会化が日本より進んでおり、その代表として「寄養」（「轮换寄養」・「寄托」）や「寄宿制幼稚園」（「全托」）が挙げられる。本稿では中国の「寄養」と「寄宿制幼稚園」に関する研究をレビューし、①この種の養育が成り立つ社会的・文化的背景、②この種の養育が家族・子どもの発達へ与える影響、③これらの研究の問題点と課題を、比較文化の視点から考察することを試みる。このような試みは、これから育児の社会化を模索する日本において何らかの参考になると思われる。

2. 中国における育児の社会化

2-1. 「寄養」という育児サポートシステム

中国の民法によれば、寄養とは未成年者の子どもを持つ父母が職業・生活上の特別な理由や状況により、子どもとの共同生活が不能となる場合、子どもを他の家に預けて扶養・教育・監護をしてもらうことを指す。ただし、子どもの扶養に発生する費用・民事責任は父母に帰するとされている。陳（1999）に

よれば、90年代に行われた調査では、地域差が大きいものの、平均して全国調査対象者の23.8%が6カ月から1年以上の寄養経験を持つという。現代の中国では寄養による育児のサポートは依然として機能していることが明らかである。

従来の寄養は、子どもの父方ないし母方の祖父母に預けることが多いが、現在でもこのような寄養モデルは一般的である。その一方で、最近では一人っ子であるため、科学的養育の機運が高まり、また祖父母自身の教育水準や孫への溺愛が懸念されたりするようになり、都市部の上海市では、同じ若い世代の親同士がある期間（例えば、1カ月あるいは2週間など）お互いの子どもを預けて養育するという家庭も現れてきた。この新しいタイプの寄養は「轮换寄養」（张，2001）と名づけられている。「轮换寄養」の効果に関して、10組以上の一人っ子家庭に対するモデル試行の結果、子どもは仲間、親以外の大人と接触する新しい養育環境を得ることによって、生活習慣の養成、学習意識、人とのコミュニケーションスキルの向上が得られ、また親にとっては負担減になるだけでなく、人と人の間の絆を深め、自分の人格的成長にもつながるというポジティブな面があると論じられている（张，2001）。

寄養が成り立つ文化的背景として、中国では育児の母親重要論は日本や欧米ほど強調されていないことが挙げられ、母親重要論の根拠とされる愛着理論はまだ一般的に浸透していないことが指摘されている（陳，1999）。しかし、最近では、中国の育児書においても共産主義イデオロギーなどの特徴が曖昧になり、母性を美化したような内容になっている（恒吉・ブーコック，1997）。また、中国の心理学者の中には、母親重要論を論拠とし、自分が寄養された経歴から寄養を批判する動き（王，1994）があり、さらにこの批判に対する反論が起り、社会的議論となった（罗・邓，2003）。これを受けて、罗・邓（2003）は中学生を対象に寄養経歴が親子関係に及ぼす影響を検討するための調査研究を行った。その結果、寄養経歴の有無による親子間コミュニケーションや親の子どもに対する理解・関心事において差異が見られなかったことから、罗らは寄養経歴を持つ子どもを問題視することを避けるべきであると指摘

した。しかし、この研究では2群間の差異を検討するための検定を使っておらず、パーセンテージの比較から結論を導いていることに問題が残る。

2-2. 「寄托」という特殊な寄養形態

近年、高スピードで経済成長を進めている中国において特に経済活動が活発化している浙江省温州地区では、子どもをクラス担任の教師に預かり育ててもらうことが注目されるようになった。先にも触れたように、従来の寄養では、子どもの祖父母に預けることがもっとも一般的であり、子どもの親の兄弟やほかの信頼している親戚に預けることもあるが、友人に預けることは極まれであった。従って、教師に預けることはこれまでにみられなかった特殊な寄養形態と考えられ、従来の寄養と区別して、寄托と呼ばれる（胡・朱，2005）。寄托児童の出現は、この地域の自営業者の多さと、最近のエリート志向への教育熱と、「道理を説く、人材を育てる」（教书育人）を天職としている教師への厚い信頼感などに関連するものだと考えられる。

寄托児童に関する唯一の実証研究（胡・朱，2005）がある。胡らは、9～14歳の合計81名の寄托児童を対象に子どものパーソナリティを調べた結果、神経質が比較的顕著で、内向的で、情緒的に不安定であり、内心を隠す力が不足しているという。さらに、この研究では、投影法による人格診断のTAT絵画統覚検査も行っている。その結果によれば、寄托児童は権利・愛情・承認・帰属・独立の欲求がそれほど強くなく、家庭や社会と結びつきたい欲求が比較的強く、欲求が満たせない場合も、反抗的な態度を取らず、消極的に従うようにする傾向がある。なお、生活に対して比較的満足し、幸福を感じているという。これらの傾向は寄托児童の特徴と結論づけられ、その形成要因は親子関係の不全であると分析している。しかし、この研究では家庭養育のコントロール群を設けておらず、厳密にこれらの傾向が寄托児童の特徴だと捉える妥当性に欠けているし、親子関係を測定していないので分析も飛躍していると思われる。

2-3. 「寄宿制幼稚園」

中国では3～6歳の幼児向けの正式な教育機関は幼稚園であり、全日制幼稚園が一般的な形態である。全日制幼稚園での幼児の在園時間は一日に8時間以上で、日本の保育園に相当する。これに対し、寄宿制幼稚園は、幼稚園機能と養育機能を兼ね備えたものであり、一般的に月～金は幼児が園に宿泊し、教育のほか医療や生活面の世話も行われている。寄宿制幼稚園は建国前の革命時代において、戦いに明け暮れて忙しい親たちの「後顧の憂い」を解決するために作られた（千葉，1995）。建国後も引き続き幹部などの一部の特別なニーズのある家庭のために設立され続け、文革大革命中に一般にオープンし、その後は縮小して行った（Tobin, David & Davidson, 1989；王，1994）。また改革開放後は、英才教育を特色とする寄宿制幼稚園が続出し、経済成長に伴う競争・核家族化・祖父母による過保護な養育などの社会状況と相まって、一部の人々のニーズに合致し、人気を博してきた。しかし、最近では再び減少の傾向にある（東方商務，2010）。

このような状況の中、寄宿制幼稚園をめぐる賛否両論あり、心理学者・教育関係者に限らず、特に育児世代中心に社会全体の関心を集めている。寄宿制幼稚園を批判する視点は、おおむね親子関係を懸念し、それを愛着理論に結びつけようとしている。例えば、ある発達研究者の意見では、寄宿させることは親によるネグレクトを意味し、子どもの心理的安定が得られなく、直接親子関係を脅かすものと見なしている（北京青年報，2003）。しかし、このような批判は、あくまでも研究者個人の視点に依拠しており、実証的研究に基づいたものではないことが問題である。

心理学領域において、中国の寄宿制幼稚園をフィールドにした実証的研究は今のところわずかである。Wang & Thomas (1995) は子どもの知能を WPPSI (Wechsler Preschool and Primary Scale of Intelligence) で測定した「寄宿制」・「全日制」・「未入園」の幼児計 184 名（4～6 歳）の言語性・動作性・総合点を比較した結果、いずれにおいても寄宿制グループの幼児の知能得点が高かった。しかし、知能の差が生じる主要因は親の教育水準であり、必ずしも

育児形態の違いによって決められるものではないことが示されている。また、寄宿制幼稚園児を持つ母子間の愛着と早期の養育経験を検討した研究（李，2005）からは、母乳による養育かどうかは愛着形成に影響を及ぼすことはなく、質の良い母子間の相互作用につながる母親の温かい養育態度が愛着形成に影響する主要因であることが示されている。

このような個別な研究が散見されるものの、前者の研究は知能発達に影響する要因を明らかにする目的で行われたものであり、異なる養育形態の機能を焦点に検討したものでなかった。また後者の研究は、寄宿制幼稚園児の愛着形成に影響する要因を検討しているが、「全日制」の統制群を設けていない。従って、寄宿制幼稚園の育児機能に関する明白な見解が得られず、まだ研究の入口の段階である。そのため、寄宿制幼稚園を利用することによってもたらされる子どもや家族成員の発達における影響について、更なる検討が必要である。

筆者らは、この点を明白に検討する第一歩として、「寄宿制」と「全日制」幼稚園児を持つ共働きの母親にインタビュー調査を行った（石・桂田，2006）。そして、「寄宿制」と「全日制」の比較より、母親の心身面の健康や夫婦関係・親子関係が良くなったという寄宿制幼稚園のポジティブな側面が見出された。また、家庭の属性の比較によれば、「寄宿制」を選択している家庭は子どもがこれまでに寄養された経験が多く、親は自営業者が多かった。「全日制」を選択している家庭は、父親が大卒以上の学歴を持つ者が多く、母親は育児サポートを実母に頼りがちであった。従って、「寄宿制」と「全日制」の選択において、寄養という文化的要因や職業・学歴などの社会心理的要因といった複合的要因が背景にあることがわかる。

さらに、先述の論文（石・桂田，2006）では発表しなかったが、我々のインタビュー調査では、「寄宿制」または「全日制」幼稚園を選択した理由も尋ねている。その結果を見ると、寄宿制幼稚園を選択した理由として、「いい教育が受けられる」などの積極的発想によるものが一番に（延べ回答の 73.3%）挙げられた。一般に認識されている「職業による物理的・状況的制限から」、または「祖父母の溺愛から逃れる」、すなわち一人っ子の家庭教育の弊害

の回避から（任，2003），といった消極的な理由も含まれているが，むしろ少数であった。一方，全日制幼稚園を選択した母親の寄宿制幼稚園に対する意見では，子どもの独立性が促進されると評価するものの，日頃の親子の関わりが子どもの成長に大事であるとの意見が一番多かった。従って，母親がどのような保育形態を選択するかは，母親自身のもつ「親子関係」や「教育観」へのまなざしの違いも重要な要因の一つとして考えられる。

3. 文化差からの考察

日本の育児期母親に注目すると，生涯に経験したストレスは男性や他の年齢層の女性に比べ最も多く，また国際的にみても育児を楽しめない母親が目立っていることが明らかである（稲葉，1995；深谷，2008）。これは，今日の日本社会で蔓延している育児不安の拡大と合致している。育児困難になっている社会・文化的要因として，「母親の手による養育」への強い期待と圧力（柏木，2010），育児サポート・ネットワークの貧困さ（落合ら，2004）が挙げられる。日本では母親の手による子育てが一番とされているのに対し，中国では子育ては母親以外の人の手で行うことも当たり前としている。その結果，母親以外の育児機能を比較した国際研究が示しているように，中国では夫，親族，幼稚園は育児サポートとして非常に効果を発揮し，また家事労働者（ベビーシッター，メイドなど）もある程度育児を分担してくれているのに対し，日本では幼稚園・保育園のみが育児の分担としてある程度の効果を発揮している（落合，2004）。

このような育児の文化差からも，日本においては，子育ては母親の個人の責任であるという意識から脱却し，社会全体が持つ文化・意識体系の変容が起これなければ，育児の社会化を確実に進めことができないと言える。最近はその意識変容を促すべく，根ヶ山・柏木（2010）がアロマザリングという概念を提起している。アロマザリングとは「母親以外の個体による子どもの世話」という意味であり，乳母・子守りあるいは大家族による子育ての歴史などから

も、日本におけるアロマザリング活用の重要性和必要性が論じられている（根ヶ山・柏木，2010）。

「寄宿制幼稚園」は中国におけるアロマザリングの一つであるが、日本人には馴染みがなく、どのように理解されるかが疑問である。そこで、筆者たちは先述のインタビュー調査の一環として、日本の幼児を持つ母親に、中国の「寄宿制幼稚園」に関する意見を求めた。その結果、もし、日本に中国のような「寄宿制幼稚園」ができたとしても、「利用しない」と回答したのは16名中12名（75%）であり、その理由は親子分離に対する親の心理的抵抗を含め「親子と一緒に過ごしたい」を一番の理由として挙げていた。それに対し、「条件つきで利用する」のは2名で（12.5%）、その理由は出張あるいは病気のときに短期間で利用したいとの回答であった。さらに「利用する」と回答したのは2名で（12.5%）、その理由はベビーホテルに入れたり留守宅に居させるよりは良いとの考えであった。このように、小さいうちは母親による育児の重要性が根付いている日本においても、時代変動の中で、親子分離による保育様式も潜在的ニーズとして芽生えていると考えられよう。

4. まとめと今後の課題

中国では経済改革後の女性は、「事業で才覚をあらわす女性（巾幗英雄）」と「良妻賢母」の二重役割が期待され、女性の負担が深刻化している（楊，1995/1998）。また、一人っ子政策による人口構造の変動から、これまで強力に機能してきた親族による育児サポート機能は、萎縮していくことが見込まれる。そこで、幼稚園の育児サポート機能がますます期待される。しかし、実際に寄宿制幼稚園を利用した中国人母親は、心身の負担が減り、生き生きしてきたとポジティブに評価したにも関わらず（石・桂田，2006）、中国の幼児教育関係者、心理学者の間では愛着理論が乳幼児期の母子分離の否定と理解する傾向があり、現在寄宿制幼稚園の数が減少している（東方商務，2010）。

「寄宿制幼稚園」を現代の子育てサポートシステムとして機能させるには、

まず幼児教育関係者・心理学者は、愛着理論に対する理解を正すこと、そして幼児期の母子分離が子どもの愛着形成を含め子どもや家族成員の発達にどう影響するかを実証的研究結果で示すこと、さらにその結果を踏まえて幼稚園実践を行うことが重要課題である。特に、実証的研究の蓄積は最も重要なことである。これまでの数少ない「寄養」・「寄託」・「寄宿制幼稚園」に関する研究は客観性に欠けるため、今後より科学的な研究成果が求められる。そうした科学的研究成果は、育児期の働く女性が増え（厚生労働省、2005）、育児の社会化が必要になっている日本においても有益な知見を与えうると考える。

引用文献

- 落合恵美子・山根真理・宮坂靖子・周維宏・斧出節子・木脇奈智子・藤田道代・洪上旭（2004）. 変容するアジア諸社会における育児援助ネットワークとジェンダー：中国・タイ・シンガポール・台湾・韓国・日本. 教育学研究, **71**(4), 382-398.
- 陳省仁（1999）. 「寄養」からみた現代中国社会の家族と子育て. 東洋・柏木恵子（編）, 社会と家族の心理学 (pp.14-22). 京都：ミネルヴァ書房.
- 東方商務（2010）. 上海寄宿形勢和幼稚園的优点和缺点（上海市における寄宿制幼稚園の情勢およびそのメリット・デメリット）. 2010年9月29日以下のサイトより閲覧 <http://www.dfyouth.com.cn/df/14096.php>
- 胡瑜・朱伟（2005）. 寄託児童特征初探（寄託児童の人格特徴についての一考察）. 心理科学, **28**(2), 473-476.
- 厚生労働省雇用均等・児童家庭局編（2005）. 女性労働白書－働く女性の実情. 東京：21世紀職業財団.
- 千葉由紀子（1995）. 母娘で行った中国留学：寄宿制幼稚園から一人っ子政策まで. 福岡：海鳥社.
- 李凌（2005）. 早期养育经验与母子依恋水平的相关研究（幼少期の養育経験と母子間愛着との相関研究）. 心理科学, **28**(3), 699-701.
- 罗国芬・邓喜芬（2003）. 寄养经历对亲子关系的影响：比较视角中的图像（寄養經歷が親子関係に及ぼす影響：比較により）. 青年探索, **1**, 20-23.
- 根ヶ山光一・柏木恵子（2010）. ヒトの子育ての進化と文化：アロマザリングの役割を考える. 東京：有斐閣.
- 任菊英（2003）. 寄宿幼儿自理能力的培养（寄宿制幼稚園児の独立能力の養成について）. 山东教育, **12**, 110-111.

- 石晓玲・桂田恵美子 (2006). 中国人母親の育児不安と幼稚園機能に対する認識—「寄宿制」と「全日制」幼稚園児の母親の比較. 人文論究, **56**(3), 23-38.
- 恒吉僚子, S. プーコック編著 (1997). 育児の国際比較：子どもと社会と親たち. 東京：日本放送出版協会.
- Tobin, J. J., David, Y. H. W., & Davidson, D. H. (1989). *Preschool in three cultures Japan, China, and the United States*. New Haven and London : Yale university Press.
- 王东华 (1999). 发现母亲 (母親発見) (上・下). 成都：四川人民出版社.
- Wang, F. F. & Thomas, O. (1995). Quality related to intelligence among Chinese children between ages 4 to 6. *School psychology international*, **16**, 59-65.
- 王宇光 (1994). 试论我国幼儿教育机构的多样性发展 (中国の幼児教育機構の多様性について). 福建師範大学学报 (哲学社会科学版), **1**, 134-139.
- 楊志 (1998). 現代中国女性の役割矛盾. 秋山洋子・田畑佐和子・江上幸子・前山加奈子 (編訳), 中国の女性学—平等幻想に挑む (pp.73-90). 東京：勁草書房.
- (楊志. (1995). 当代中国女性角色冲突的现状. 中国人民大学女性研究中心编, 中国女性发展与角色冲突. 北京：民族出版社.)
- 張兴华 (2001). 轮换寄養—独生子女家庭教育的思考和探索 (轮换寄養—一人っ子家庭教育についての思考と探索). 石油教育, **105**(2), 30-31.

——石 晓玲 文学部契約助手——

——桂田恵美子 文学部教授——